

自分らしく生きるための挑戦〈前編〉——NHK、フリーランス、そしてパリへ

NHK入局

自分の人生を賭けたはじめての挑戦——それは大学4年で経験したマスコミ入社試験でした。合格したNHKを含めテレビ局4社を受験しました。

当時もマスコミは人気の業種で、女子の倍率はどこも数百倍。中でもテレビ局は折からのキャスター・リポーターブームに乗ってどこも1000名を超える受験生が詰めかけ、とびきり狭き門でした。しかも単に倍率が高いだけではなく、日本全国から我こそはという才色兼備の女子大生が大集合するわけです。中には、帰国子女で東大生で現役のモデルと三拍子揃ったスーパー女子大生というのもいて、とにかく神様は人間を決して平等に

作りたもうてはおられないことを痛感させられたものです。

一方私はといえば、大学は私学ですし、有力者のコネがあるわけでもない。帰国子女でもなければ、とりたてて特技もない。容姿はといえば、胴長・短足・富士額ふじびたの三拍子揃った典型的日本人で身長は150センチそこそこ。確率論で言えば、どう考えても合格するわけがありません。

不合格になつて傷つきたくない、恥をかきたくない、という思いが頭をめぐらなかつたわけではありません。就職を希望する女子大生の現実の厳しさと、自分が思い描く自分らしい人生とのギャップに、夏休み中、暗く閉め切つた自室で布団をかぶり悶々と思い悩む日が続きました。そして悩み尽くしたある日、こう思うに至ります。

たった一度の人生、突き詰めれば二つに一つ。「やれそうなことをやって生きるか」、「やりたいことをやって生きるか」だ。私だつたらどんな苦難が待ち受けていようと、絶対にやりたいことをやって生きて行きたい。それならば、もういつそ滑り止めなどやめて一発勝負に賭けてみよう。受かりそうなところではなく、一番したい仕事をさせて

くれそうなところに全力投球しよう。

こうして、文字通り打ちてし止まん、玉碎覚悟の就職戦線が始まりました。

後悔の無い就職活動をするには、とにかく自分が最も自分らしくいられるスタイルをしなれば。そう思つてリクルートブックではなく、面接にはパンツスーツに髪型もショートカットで臨みました。当時、女子でスカートを履いていない受験生は、誰一人見かけませんでした。とにかく元気と活きの良さだけは誰にも負けない、そんな気迫だけで駆け抜けた数週間だったと思います。

そして手に入れた、NHKからの合格通知。しかも人生は不思議なもので、ディレクター志望の私が、その年同局が採用したただ一人の女子アナウンサーとして選ばれたのです。アナウンサーなどなろうとも、なりたいたとも、なれるとも思つていませんでしたので、最初のうちは正直とまどいもありました。

けれど入局後は、魅力的な先輩や仲間たちにもつたないほど恵まれ、贅沢この上ない

環境で学び、仕事をさせてもらいました。当時NHKの看板番組だった「夜7時のニュース」を歴代最年少で担当する機会をいただく一方、国内外へのリポート取材にも数多く出していたいただいたお蔭で、数え切れない人や現場と出会い、刺激を受け、経験を積むことができました。

フリーランスに

次の大きなチャレンジというと、NHKを離れてフリーランスになった時でしょうか。

NHKではジャーナリストとしての基本や精神を十二分に学ばせていただき、ただただ感謝の一言に尽きますが、そうした理想的な職場にいなながらも、やはり私は組織に向いていないという思いは日々募っていききました。

もちろん、お世話になったNHKを離れるという決断をするまでには、色々と思ひ悩みました。プロとしての能力や経験を持ち合わせているわけでもないのに、組織からの保護もなくして、どうやって生き馬の目を抜くマスコミ業界で生きて行くのか。仕事が来なく

なつたら、どうやって食べて行くつもりか。不安は考えきれないほどありました。でももと、「やれそうなこと」ではなく「やりたいこと」をやって生きてゆこうという覚悟と気迫だけでNHKにも入局させてもらったわけです。自分が心の底から本当にそう求めるのなら、どんなに成功しそうな困難な道でもそちらを選ぶべきではないか。

結局私は、保護より自由を、安定より感動を選んだ結果として、フリーランスの世界に飛び出しました。

NHKからの独立は、言わば一アナウンサーのトラバークに過ぎないと思うのですが、マスコミからの攻撃はすさまじいものでした。いきなり洗濯機の中に放り込まれたような謂ないバッシングの嵐に、生まれてはじめて晒されました。また親身になって心配してくださる方からも、「フリーになって成功した人なんてほとんどいないのに」と後ろ向きのコメントを頂戴することが多く、元来減点主義のこの国で何かにチャレンジすることのハードルの高さを思い知らされました。

フリーランスになって取材に行ったある県立高校でのことです。県内でもトップの成績

を誇るその生徒さんの一人からこんなことを言われました。

「なんでNHKを辞めちゃったんですか。NHKにいた方が良かったのに」

どうして彼がNHKにいた方が良いと判断したのか、それ以上の言葉は交わしていないのでわかりませんが、「NHKにいた方が安定しているし、ステイタスも高い。フリーランスになつてリスクを背負うなんて馬鹿げた選択」だと、頭の良い彼はおそらくそう考えたでしょう。高校生にして、この安定志向。でもそれが日本という国の偽らざる常識で、常識破りをしているのは明らかに私の方でした。

ただ、皆さんからの心配をよそに、フリーランスとしての活動はきわめて順調でした。日本がバブルの絶頂をやや下り始めたくらいこの時期でしたから、とにかく引きも切らず仕事の依頼がありました。キャスター業を軸に、講演や文筆活動などテレビ以外の仕事もどんどん増えて行きました。週刊誌にコラムの連載を持ち、別の雑誌では隔週で企業内起業家のレポートを連載。さらには、官庁や企業の発刊する機関紙などでのVIPインタビューに、各種シンポジウムへのコーディネーターやパネリストとしての出演、加えて特別番

組の時期には海外ロケが入ったりと、よほど注意して休みを取って行かないとすぐに一ヶ月くらい休日がなくなってしまうような、とにかく息つく間もない忙しさでした。

パリへの移住

次なる人生の挑戦は、EC（ヨーロッパ共同体、現EU）の招聘を受けてパリへの留学を決めた時。正確には移住と言うべきでしょうか。キャスターとしてのすべての仕事を整理して、その後2年半、特別な講演会やシンポジウムなどで数日間滞在する以外は日本へ帰って来ることはありませんでした。

フリーランスとしての仕事があまりに順調で忙し過ぎたことが、かえって仇あだになったのかも知れません。フリーランサーの方なら誰でも経験していることだとは思いますが、依頼された仕事を断るといふことは、非常に勇気のいることです。一度断ってしまったところからは、通常もう二度と仕事はいただけませんので。

もちろん自分の志向と違う仕事でしたら、それは仕方ありません。私もパーティーの司会などは、よほど意義があると自分で思えるもの以外はお断りしていましたし、映画やテレビドラマなどへの出演も、ジャーナリストとしての自分の方向性がぶれる気がして全部お断りしていました。ただ作品の大ファンだった亡き相米慎二監督から映画への出演依頼を頂いた時は、監督自らが撮影現場に私を招いてくださった上、台本やセット・衣装の説明までしてくださったのでかなり心が揺れました。でも、結局はお断りしてしまいました。今になると、あんなストイックなことを言っていないで、それこそ挑戦してみれば良かったのにと悔やまれてなりません。

話がそれましたが、とにかく自分の方向性とあつた仕事を断るのは、なかなかできることではありません。その結果、スケジュールは過密になり、フリーランス生活も3年目を迎える頃には、私はすっかり仕事に追われるようになっていました。

より自分らしく生きたいと願ってフリーランスになったというのに、あの頃の私には生きる覇気が消えかかっていました。求めたはずの自由や感動から、最も遠いところに行つ

てしまったようで、来る日も来る日も自宅のマンションから見える景色が灰色一色にしか見えなかったことを、今でもはつきり覚えています。

このままではやがて完全に自分を見失って、流されて行ってしまう——そんな危機感に始終襲われて、今にも押し潰されてしまいそうでした。

別にそう深刻に考えず、流されながら適当にバランスを取って行けば、やって行けないことはなかったのかもしれませんが。それが世間的には、大人になるということなのでしょう。でも、私にはできませんでした。

もしこのまま流されてしまったら、二度と自分の運命に挑戦することが私はできなくなってしまう。守りの人生で終わってしまう。守りに入ってしまった自分なんて、生きていくとは言えない。ここで自分をゼロに戻して、もう一度原点から自分自身を見つめ直す。そう思った私は、パリに旅立つことを決めました。

この決定には、さすがに十人中十人から反対されました。それまでどんな私の選択にも異論をはさむことのなかった母からも、「こんなに沢山のお仕事を皆さんから頂いているというのに……」とため息をつかれてしまいました。それでも私の銀行口座からパリへの送

金や仕事の依頼電話への対応など、パリと日本をつなぐ様々な手間は母に引き受けてもらう以外ありませんでした。心配させながらも、海の向こうでの生活を陰で支えてもらったことは、今でも本当に申し訳なく、またありがたく思っています。

パリでの日々は、それまでの社会人としての生活ですっかり溜まってしまった人生の煤すすというか澱おぼりのようなものを、見事に濯すすいでくれました。そしてあらゆる社会的な既成概念から私の精神を解き放ち、感動すべきものに感動できるありのままの自分を取り戻させてくれました。流れる雲やそよぐ風のうつろいに思わず心奪われる、そんな自分になった時、この世に本当に大切なものなんてほとんどないことと、それを失くしたら自分が自分でなくなってしまうかけがえのないものが確かに存在することを知りました。

フランス語の習得も人的なネットワークの構築も、日本を発つ前に期待したほどの成果は上がりませんが、それでも「本当の自分はパリで生まれた」と、そのことだけは胸を張って言うことができます。